

表紙

6039

道話記聞 三十一

6040

道話記聞卷三十一

蔵印

一中澤先生御遺書

同対策

6041

参前舎 丸朱印

享和三亥歳五月六日はくろ町高嶋屋嘉五右衛門殿
予と式人を中沢先生居間江招給ひて仰遣るハ
当八月ハ京都江罷上るに付愚意之趣代筆
にて書残し置んと思ふ此書付を見て下されと
見せ給ふによりて兩人つくくと拝誦し申
けるハ随分是はよろしく候半なれとも御自
筆にてなくは諸人うけかい申まし末の方

6042

く御自筆の添書なされ予らに御渡しなさるへし
といひければ先生尤とのたまひ則末江自筆
を加へ渡し給ふ其月下旬より病氣付給ひ 然り
に腫物出来大ニ痛む由申さるゝに付当地ニ名
人と呼れたる外科杉田玄伯左ニ見せけるに こ
れハ対喉瘡といふ腫物にてむつかしきよし
療治も出来兼る由 皆々大ニ驚き早速御官医
桂川甫庵様を相頼ミ又内治ハ医学館のぬし
・
多喜安長様御療治ありけれとも老病之事
天運の究る所か次第くにおとり給ひ六月
十一日死去し給ふ 七十九才也皆々幼き子供
母を失ひたる如く悲しめとも甲斐なけれハ武
藏国葛飾郡猿江なる妙寿精舎に葬りて
一墓の主とハなり玉ひぬ

6043

野辺送り六月廿日葬送の人数一千余人

法事ハ寺にてもいたし候へとも又々参前舎へ
集る人三百余人非時壺汁五菜引物餅菓子

御病氣より法事迄の入用金七拾四両式分此

内妙壽寺へ納金廿九両壺分也 但し祠堂金とも
諸々より至來の香奠金七拾七両也 差引のこり

金式両式分中沢妙意様へ遣す

此外金五百■人足寄場御奉行様より被下候

是ハ御上より頂戴之香奠なれハ後證のため
其儘京都明倫舎へ相登す 書付の名目失念
御遺書のうつし

末ニ享和三年八月とあり

是ハ八月上京の思召故月日相違
五月六日ニ予ら江御渡し也

頼置候口上書

私事御存之通近年は別て及老衰何事ニ
不限失念勝殊ニ入組候用談等之事前後
不極之事共多々御座候ニ付參前舎之義

604

此度より各様方江御頼置勿論當時之事ニ

不限此末共ニ万事為御任御頼申度候間万端

御踏込被成候て御一同御相談之上御取計可被下候

右御頼申上候上は於私義一存之存寄を以取

計ヒ不仕御一同御相談之上取計ヒ可申候存寄ニ

御座候各様方ニも御一存之御取計ヒ不被成御一同ニ

御相談之上万事御取計可被下候此段御頼申

置度荒増之条左之通御座候尤京都より参居候

御舎中一統申合候定書有之候得は猶又参前

舎之義は是迄致来候格式も有之候故為念

私存寄を御頼置度左ニ認候

一遠国近国共ニ新舎取立等之義申立候節は

是迄致来候通能々相糺之上明倫舎江願之

添状都講中より差出シ舎号相下引渡等之義も是

迄仕来之通急度法例不乱候様ニ御頼申候事

一 京都并諸国交通等之節も御一同ニ御申合何事ニ
6046

不限御相談之上御掛合可被下候事

一 前講御兌之節は都講中御一同ニ御聞性理心 *?

得之程等御糺之上御評議被成候て其上ニテ御兌

可被成候則印鑑等は前々仕来之通御渡可被下候尤

本講之義は勿論之事ニテ御座候事

一 善導印鑑御渡被成候已前ニ一通り為致候て始終一
同ニ御聞被成候て不行届所有之候ハ、其段御示被成
候て御一同ニ御同心ニ候節善導札御渡シ可被成候
..

未熟ニ候ハ、幾度も下地を致覚させ候上ニテ御頼可
被成候先入を主とする修行第一之事ニ御座候間

御勘弁可有之候事

一 都講加入被成候節御一統御評議之上御頼可被成候事

一 補仁方御頼候義舍中一統申合定書相渡候て

其旨為心得御頼可被成候事

一 講師他国江出候節印鑑相渡頼之添書是迄之
通御渡可被成候兼て前講致候御方々江印鑑無之

6046

他国江出候て道話等致候事不相成候段可申聞置候
都講衆中江無届印鑑も所持無之參候ハ、前

講印鑑取上急度以来之所御断り可被成候說口

先々江も不埒之儀可申聞候

一 不限何事ニ修行躰之事ニ付諍節相發候節

相對之諍ニ不及都講中江出候て其評能々可

請候事

一 舎中方心得違有之候節は都講中より申聞候

歟又は口入之方江申合相改候様可致候委細之事
は申合定書ニ有之候間兼て之義は一統ニ相心得
候様ニ御副書渡之跡ニテ社中申合定書為読聞
若相背不用候事於有之は御断書副書共
取上可為破門候事

是より先生御自筆也

御断り申上候右十ヶ条之義自分ニ認度候

得共御存之愚老無拠代筆相頼認メ

6047

置候間吳々も御一統に御心得被下様御頼
申上候

享和三亥年八月

中澤道二

書判

参前舎

武家

御都講中様

町方

圭明舎

武家

御都講中様

町方

慎行舎

武家

御都講中様

町方

盍簪舎

武家

御都講中様

町方

御都講中様

武家

月日の関の戸早く明てことし文化六年已とし
七とせの年日になりぬれば舎中打より法筵を
いとなミありし世に仰られたること共語り出し
侍りて追福をなしぬ

道二翁の七回忌の筵ニテ

あふきく 書侍る 了阿

かいつけ

久方のあめにたぐへていや高く

世にあふかるゝ 風やすずしき *

6048

中澤のうしの七回忌に

明義

久保三左衛門

ありし世の立なりながら 蓮葉の
うらさひしくも 見ゆるけふかな

中澤先生の教誨に雀わちうく
からすハかあく人ハ孝行と誠に
しかなり 人もわれもあへなんもの
をわすれ草の露はかりも心に

6049

おかげ いとなみのいとある折
ふし 軒ちかくすゝめからすの
啼を聞いてそれかれの事思ひ
出るまゝよみ侍る

忠孝の道にすゝめ堂耳ちかく

田原 船積 由右衛門

こえをからすも人のためかあ

中澤先生の七回忌にたはれ哥をよめる

をなしく 由右衛門

七とせにはやなりひらとあちこちに

きのふけふとハおもひけるかな

中澤先生のおきなの七とせの

祭祀によめる

栄女 大和田おゑい

蓮葉のにこりにしまて なき人の
つゆのめくみそ 世に残りける

中澤翁の七回忌に参前舎の

御送り 魚積

はちすを見てよめる

平兵衛

なき人のあかす愛にし蓮葉農の

広き名こそは代々に残らめ

6050

おなしく

きせ 同妻

曇りなき月にたくへて有し世を

おもひ出ぬ累るミしか夜の空

おなしく

栄女

いや高き教へハ代々に 残る羅舞らむ

曇らぬ月の影もすゝしく

..

中澤大人の七回忌にある人の

あめにたくへてと よめるを聞いて

また君子の徳は風のことしど

いへる事を思ひ出て

明義

今はなを に保ほる風の冷しさに

なひかぬくさハ あらしとそ思ふ

6051

中澤先生対策

或人先生に問ふて 曰いわく 三界無安唯如火宅と申

て此世は皆火宅の住居と承り候如何致候ハ、

此火宅を逃れられ候哉

社中の答へに

よしあしの思ふ心をふり捨て

只何となくすめは住よし

6052

中澤先生の曰

なるほど其歌の通りに違ひはないか其唯何と
なくすむといふ事がどうも出来にくひかたひ事
しゃく 右哥にも

浪の音きかしかための 山住居

苦は色かはるまつ風のおと

といふてこちらの火宅を一色片付けハ又あちら
から起つて来る手まくになけれハ親類うち

..

から持ツて来て苦しめる とても此からたの有ル
内は此火宅を逃ルゝ事ハならぬくによつて
なる程此世は火宅しやといふ事を真実に覚悟
をすれば少しハ火宅を連れらりようとまあ

わしハ思ふ

又問

前にいふ火宅を真実に覚悟を致するハ
いかゝして得られ候哉

6053

先生御答

此真実に覚悟するといふ事中々私案分別
を以て及ぶへからず此道に入て本心の一端を

しり旧染の悪事ハ改るといへとも長養なき

人はやゝもすれば火宅にさへられて本分

之我なしに至る事あたハす よつて時々刻々

年月を重ねて見得したる本心を養

ふへし養ひ熟する時我なしの本体ハ安

..

樂を求めすして安樂に至るへし

其時身に安宅を眞実に覺悟する事を
中庸に君子は其位に索して行ふ其外
を願はず富貴に索てハ富貴をおこない
貧賤に索しては貧賤を行ひ夷狄に索
してハいてきをおこない患難に索してハ
くハんだんを行ふ君子ハ入として自得せさ
ることなしと

6054

我役はいやな役しゃと思へとも

天の作しやの差図ニ是非なし

或人とふて日 きのふ芝居見物に參り
まして一日芝居の狂言はかりに成ツて
おりましたハお影にて我なしに
成ておりますと存ますと言し時

..

中澤先生曰

夫は心か宿かへをしたのじやと仰られた

其意いかん

又御答

君子ハ此方へうつる小人ハ先へとらるゝ
芝居を我物にして見るへしうつるも
とらるゝも皆心の沙汰也

近思録に加るか故に君子の学ハ廓然
たる大公物來ツて順応するにしくハなし

6055

芝居より我たましいのふんしつを

せんきし給へ参前舎にて

或人問今日こなた此方こなたへ参りかけに両国橋を
通りましたれハちいさき紙に仏の像を
画きてあまた流して居りました

何れも利益のある事てこさりますか

..

中澤先生曰

夫も何か仏道にて利益ある事て有うぞ

又問

私のしる人も夫を信心して致しまし
たか利益もなく疾ひも直りませなん
だ 左すれハ多くの紙費まいすへにてミニな
売僧まいすの致す事て有うと存ます

先生答へて

6056

其人は夫てよしおまへは利益もなし心に

叶はぬと思ハ、お前はよさんせ

先妻ある方へ娘を後妻に遣しける時申
けるハそなた先へ行て如何心得候哉と問
ければ娘のいはく先の子供を実子の
如くすいふんかわゆかり候半といひけれハ
或老人の日夫ハ大キなる心得違ひ成へし

..

答

といはれて則娘に示されける事いかん

老人の日夫か心得違也何程此方にて愛す
へきと思ひても親の心子しらすにていとけ
なき者は兎角無理我儘はかりいふて此方
の思ふ様にハ思はぬもの也其時そなたの心
の中にわしか是ほど寵愛すれとも夫を其
やうに思はぬ事しやと思ふ一念より其

6057

子に憎ミか付て夫より追々不和合に成り行
もの也 夫はいかにといふにわしか是程愛する
にと思ふ心の費へ也 されは愛すへきと思ハん
よりハまだおさなき者ゆへたとひ如何様の無
理をいふとも何やらの事かあらんとも我真実
の子の如く思ひて憎むましくくと心にとめて
養育せられ候ハ、末永く相続致すへし

とそはなされけり

..

右は中澤先生の御物語りにて又舎中へ御
しめし有けるハ

愛すへしと思ふハ末也 憎むましと思ふハ本也
されは初学の者は善事をなさんと思ハん
より先悪事をは せましき事そと思ひ

とりて修行致され候かよろしく候 善事を
なさんと思ふハ末也悪事をなすましと思
ふハ本也 何事にも本末あり

6058

大学に物本末あり事終始あり

論語に有子ノ日君子ハ本を務む

本立て道なるとあり

或人問 日中に神仏へ灯明を上候事いかん

中澤先生答て日

昼ハ明りに用ハない心のまことを照すのじや
じやによつておとうめう計てない銘々心の

■をてらしやツしやれや

或僧ノ

問 世に加持祈禱の類多く有事也

此大意いかん

先生答

易に日^{いわく}坤道ハ夫順なるかな天に請て時々
行ふ いふ心ハ天萬物の氣を降す地是を受
て能行ふて萬物なる加ハ陽也持ハ陰

なり則體用なり

加持の文字ハくハへたもつとよむ祈禱ハいのり
いのるの義也

先生示して日

たとへハ御高札ハ加にして上より教ヘを下

し玉ふ民ハ持にして是を能たもち

守りて行ふ時ハ万事成就す陰陽

合体せされハ萬事成就せず

或人問 魂ハ冥途に帰すれとも魂ハ此世
に留りて帰らす杯といふハいかん

* 眇 俗字

中澤先生答て日

器物の落て割る時其音にひつくりする

是魂にして天に帰す其品を見て惜ミ

思ひを残す是魂にして地に止るなり

たとへハぼた餅を喰ひうまきと思ふハ魂

にして天に歸し餅ハ腹中二入て地に止るか如し

6060

或人の許にて先生飯を食給ふに平

の内のせり松たけ様の物を残してあり
けるを傍の舎中見て夫て御下ヶなさ
るゝとすたりませう是へ下さりまし
私かたへましやうといひけれハ

先生答て

是ハ生ゆでからしてこわい よしになされ

するハ勿体ないか是と我身と量にかけて
見やしやりませ

孟子のいはゆる□道ならんか

或人問

好事門を出す悪事千里を走るとハ如何

先生答へて曰

清水の中へ油を一霁入れた様なもの也

油か水の中に目立なり

6061

人ハ天に住んで善事をなすハ水の中へ水を
入る様なものしやに依て門を出す人もしら
ぬ也 すましき悪をなす故直に千里をはし
るなり 水へ油を少し入たるの如し 参前舎印

了 令和七年六月